
(続) アンパンマン・シュール (仮)

高浜ゆりえ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

(続) アンパンマン・シュール(仮)

【Nコード】

N0250B

【作者名】

高浜ゆりえ

【あらすじ】

この小説は、賛否両論別れ、政治家達の大激論を呼んだ(わけでもない)奇作【アンパンマン・シュール】の正当なる続編である：アンパンマンは乾いた世界、つまり我々の世界に召還され、戦争に参加することによりその心は完全に荒んでしまった。そりゃあもう【矢車と影山ほど】……ではないが。なぜ生きるのはそれ程までに辛いのか?! : その答えがこのシュールな世界にはある! 生命とは? 愛とは? 答えを探せ! アンパンマン! ……前作を知らない方でも【80パーセント】くらい楽しめるジオ○グ的作品：【前作な

んて飾りですよ・偉い人にはそれがわからんのです】………ってあらすじだけで前ページに戻らないでッ（ジャンピング土下座）

第一話 運命の少女（前書き）

時はまさに、世紀末。

第一話 運命の少女

アンパンマンはそれでも、幸せを求めて立ち上がった。

そこから、彼の新しい人生が始まった。

多分、中東のどこかであろうか

砂嵐の砂漠を歩きヘトヘトになったアンパンマンは、彼の今後の人生を大きく変えた一人の女性に出会った。

「きっ…君は…?」

アンパンマンの前に立っていたのは、16・7歳くらいの少女であった。

小麦色の肌に、長いストレートヘアの清楚な感じの人である。

「…誰か…いるの…?」

その少女はアンパンマンにぶつかった。

「…君は…」

アンパンマンが言いかけると、女性は申し訳なさそうにアンパンマンから離れて口を開いた。

「…私…目が見えないの…あなたは…だれ…？」

女性は不安そうな顔をしながら、アンパンマンのいるであろう方向に顔を向けた。

アンパンマンは少し戸惑ってから、答えた。

彼は、大量殺人鬼呼ばわりされていたからである。

「僕は……………アンパンマン」

アンパンマンは憔悴しきった顔で答えた。

「…アンパンマンさん……………ごめんなさい……………私から離れてください」

アンパンマンは自分を知らない人間に会えた喜びと同時に、彼女の言葉に不安を感じた。

「…え……?」

自分のことを知らない人に会えたのに、今別れるなんて、今のアンパンマンには辛いことであつた。

「……なぜ?」

アンパンマンの声をジープの音がかき消す。

「…?!」

次の瞬間、アンパンマンが少女に質問したその『答え』であるだろうものが現れた。

「…き……きたっ?!」

少女は突然震えだし、走って逃げ出そうとして転倒した。

「アーニャ!! 見つけたぞ! てめえ! 早くこっちに来やがれ!!」

サングラスをかけた商人風の男と、ハゲの巨漢が砂漠の向こうから

ジープに乗って現れた。

第一話 運命の少女（後書き）

この物語はアンパンマンという知的生命体が冷たく乾いた世界で【答え】を見つけ、そして自らに架せられた鎖と十字架を背負ってでも力強く生きようとする【生命】と【愛】の物語である。

第二話 異界の商人（前書き）

砂漠は、人の心を荒ませるのか。

第二話 異界の商人

サングラスをかけた商人風の男と、ハゲの巨漢が砂漠の向こうからジープに乗って現れた。

「逃げてアンパンマンさん！」

叫ぶ少女。

「なっ?! なんで！」

アンパンマンはわけが分からず戸惑った。
未だにこの世界の常識には疎かった。

「なんなんですかあなたは?!」

商人風の男はサングラスをキラリと光らせてジープから降り、はだけた服からのぞく胸をボリボリと掻きながらアンパンマンを睨みつけた。

「あ!?! 俺はその女の所有者だ! バカ野郎め!」

続いてジープからハゲの巨漢が現れた、見るからに頭が足りてなさ

そうな奴だった。

「あんだあお前?! このヤッポスさんはなあ! 中東では有名な人身売買の仲介役なんだよ! 知らねえのか?!」

巨漢は豚が一匹入っているかと疑いたくなるほどデカイ腹をボリボリと掻き、野太い腕でアンパンマンを威圧した。

「…この女の子の…所有者…?」

立ち上がろうともがく少女を背に立つアンパンマンは耳を疑った。

「そうだ! どけ!」

ヤッポスと呼ばれた商人はアンパンマンを突き飛ばし、少女の腕を乱暴に掴んだ。

「いっ…いやあっ!」

少女は泣きながら抵抗するが、商人の腕は少女のか細い腕を引っぱった。

「やつ…やめてください！おかしいじゃないですか！」

アンパンマンは立ち上がり、商人の腕を掴んだ。

「なっ！？なんだてめえ！やるってのか豚顔野郎が！！」

ヤッポスは掴まれた腕を振りほどき、頭に巻いたダーバンの中から小さな小型拳銃・マカレフを取り出した。

「ぐふうっ！」

もう一人の巨漢はジープから巨大な鉄球を取り出し、鉄球に繋がれていた鎖を掴み、アンパンマンを睨みつけた。

「人間を売る行為はこの世界でだって禁止されているはずだ！それを……なんで売り買いするんだ！お前たちは！」

アンパンマンは一応、この世界の常識を身につけていたようであった。

…建て前だけの…常識を…

「…クツクツクツ…！！」

ヤッポスはアンパンマンの言葉を聞き、頭を抱えて笑いをこらえているようであった。

「ヒャーっはっはっはっはっはっ！こりやああああいいや！ヒャーはっはっはっはっ！」

ヤッポスは大地を腕で叩き、よじれそうな体を悶えさせた。

「ぐふぐふう！」

巨漢もゴリラのように胸を叩いて笑っていた。

「なっ！何がおかしい！」

アンパンマンは肌の王様になった気分を味わいながら叫んだ。
心なしか拳に、力が入る。

「はっ…はっはっ………お前は…この世界のことを…まるでわかっちゃんねえ……」

ヤッポスは腹を抱えながら立ち上がり、冷ややかな瞳でアンパンマンを見つめた。

「なに……？」

アンパンマンの眉間に、しわが寄った。

第二話 異界の商人（後書き）

今まで死地を歩いてきたアンパンマンの知らない、世界の真実とは。

第三話 せかいのほんとうのすがた（前書き）

それは、かなしいすがただった。

第三話　せかいのほんとうのすがた

「はっ…はっはっ……………お前は…この世界のことを…まるでわか
っちゃいねえ……」

ヤッポスは腹を抱えながら立ち上がり、冷ややかな瞳でアンパンマ
ンを見つめた。

「なに……?」

アンパンマンの眉間に、しわが寄った。

「人身売買の禁止なんてもんはスーツ着て美味しい酒と肉を食ってい
い女を毎晩抱いてるエライ奴らの（建て前）さ！」

ヤッポスは瞳をギラつかせて叫んだ。
。

「…そ…そんな！」

アンパンマンは建て前ではない世界の真実を目の当たりにし、震え

た。

「この砂漠の世界を見て見ろ！水も畑もない！食べそうな生き物もない！」

ヤッポスは両手を広げ、少し悲しそうな瞳で大地を見回した。

その大地は数千年前から変わらない暑い熱を帯びた、乾いた世界であつた。

「あるのは炎と燃える黒い石油と…その石油に群がり戦火の炎を蔓延させてきた列強の正義の軍隊！そして延々と戦いを要求する宗教とマラリアだ！」

ヤッポスは、自らの眼前で左手を広げた。

「そ…：…そんな…：…そんなことは…！」

アンパンマンはその鬼気迫る表情に圧され、たじろいだ。

「だから売春よし！人身売買よし！…なんでもしなけりやあ…生き
ていけないんだよ！この世界は！」

ヤッポスは倒れた少女を指差して叫ぶ。

「その女だって俺達が目をつけて連れ去らなかつたら今ごろあの寂
れたなにもない廃墟の中で死んでたんだぜ！」

「……………」

少女は泣いていた、その罵倒は…少女にはあまりにも正論に聞こえ
たからだ。

「性の玩具になろうと…3日間パンを与えてやっただけで感謝して
欲しいもんだぜ！」

その言葉に、流石にアンパンマンはキレた。

「…そんな…だからって…！！！」

【あの村】の懺悔以来、封印していた闘争本能に火がついた…

「そんなこと…していいはずないだろ!!」

アンパンマンが激昂した瞬間、ヤッポスは右手の拳銃を構え、冷めた瞳でアンパンマンを睨みつけた。

「…うるせえ奴だな…それが分からない奴は…死ねよ!!」

「なっ?!」

乾いた声をかき消すように、乾いた銃声が砂漠に響いた。

「きゃああああっ!!!!」

銃声と脳天が弾け飛ぶ音に悲鳴を上げる少女。
アンパンマンの頭に弾丸が貫通し、血液のようなものが噴射した。

第三話 せかいのほんとうのすがた（後書き）

アンパンマン、死す。

第四話 アンパンマン、死す。(前書き)

さらば、アンパンマン。

第四話 アンパンマン、死す。

「…なんじゃ…こりゃああつ……………」

鉛の弾が、アンパンマンの脳天を貫いた。
短い断末魔が響いた。

「きゃあああああっ!!」

少女の頬にベトリとした血のようなものがついた。

「…ひっ…ひっく…!」

少女はそれを指でなぞり、叫んだ。

「ひっ人殺しっ!!アンパンマンさんがああっ!!」

少女は血のような物体を頼りに、凶弾に倒れたアンパンマンに近づいた。

「アンパンマンさんは…アンパンマンさんは私に話しかけてきてくれた唯一の人なのに!…あなたは…あなたはっ!」

少女はヤッポスのいる方を睨みつけた、視界の無い彼女にも、その悪意を感じることができた。

「うるせえっ！早くいくぞ！：相手先が首以外のところを長くして待ってやがるんだ！へっへっへっ！」

ヤッポスは下品な笑みをこぼしながら少女の腕を引っ張った。

「いやっ！：アンパンマンさんはまだ生きてる！生きてるのっ！：：だから………！」

少女はヤッポスの腕を振り払い、アンパンマンの胸に耳を当てた。

「アンパンマンさん！」

「…うそ………?」

アンパンマンの胸からは、躍動を感じ取ることができなかった。

「はっはっはっ!! ほらな! 死んでやがる! 早くいくぞ!!」

ヤッポスは愕然としている少女の腕を再び掴んだ。

「いやっ! 私はここで死ぬっ!! :アンパンマンさんと同じ:天国に行く!」

それでもアンパンマンの胸に耳を当てる少女の前に、ヤッポスの堪忍袋の尾が切れた。

「てめえ………!! くそ! ムカついたぞ! こうなりやここでヤッてやる!!」

ヤッポスの瞳が狂気に満ちる、すると巨漢が流石に焦ってニヤリと苦笑いをした。

「いいんですかい傷モノにして？相手先に怒られやすぜ」

巨漢は言葉とは裏腹に少女の後ろに立ち、少女威嚇した。

「!？」

少女は恐ろしい二人に囲まれ、言葉の出ないないほどに恐怖した。

「死んだ変顔男にゾッコンの変態女なんて！一発やらないと改心しないだろうが！やるぞゴルアッ！！」

ヤッポスは社会の窓を開けながら、少女を一気に引っ張ろうとした。

「ぎゃあああああああっ！！！！」

少女の悲鳴が砂漠に響く。

第四話 アンパンマン、死す。(後書き)

少女の運命や、如何に。

第五話 死と新生。 (前書き)

蘇れ、小麦色の勇氣。

第五話 死と新生。

アンパンマンは死んだ。

しかし、愛と勇気だけは、死なない。

ヤッポスは社会の窓を開けながら、少女を一気に引っ張ろうとした。

「きゃあああああああっ！！！」

少女の悲鳴が砂漠に響く。

しかし、ヤッポスの腕が動かない。

「……………」

死んだはずのアンパンマンの腕がゆっくりと動き、ヤッポスの腕を

掴んだ。

「なっ?!」

「ウホッ!？」

同時に驚くヤッポスと巨漢。

次の瞬間、死んだはずの男：アンパンマンが口を開いた。

「…確かに：アンパンマンは：死んだ」

アンパンマンはヤッポスの腕を掴む拳に力を込め、瞳を開いた。

「いでえああああああっ!？」

ヤッポスは骨まで砕いていくアンパンマンの黄色い拳を見つめて呻

いた。

「なあっは?!」

巨漢がヤッポスに駆け寄り、その碎けた右腕と立ち上がったアンパンマンを見て驚いた。

「あ…………アンパンマンさん?!」

少女はすつくと起き上がるアンパンマンの存在を感じ、歓喜の涙をこぼした。

「…みんなが知っている…アンパンマンは死んだ…」

アンパンマンは立ち上がり、再び血を吸った黄色い右手を見て呟いた。

「ちっちっち…!畜生!じゃあてめえはなんなんだっ!」

ヤッポスは残された左手でトカレフを構え、アンパンマンを睨みつけた。

「…今の…俺は…」

アンパンマンは一瞬だけ、自分のために二度の涙を流した少女を見つめ、視線を二人の悪鬼に戻した。

「…ただ一人の女のために…命をかける男だ！」

アンパンマンはひらりとマントをなびかせて少女を抱えあげた。

「アンパンマンさん！」

少女は砂にまみれた腕で涙を拭きながら、アンパンマンの躍動を感じた。

心臓は躍動は無いが、そこに生命を感じた。

「もう大丈夫だ！：お前だけは俺が守る！」

アンパンマンは飛翔し、少女をヤッポス達から五キロほど離れた場所の岩の影へと置いた。

「ここなら：安全だ」

アンパンマンはヤッポス達のいる方角を睨みつけながら呟いた。

「：アンパンマンさん！」

少女は不安そうな表情で、背を向けて己の戦いに駆けていくアンパンマンを呼びかけた。

「：…」

アンパンマンは無言で振り向き、少女を見つめた。

「死なないで……………」

アンパンマンは静かに微笑むと、少女の髪を優しく撫でてその頬と自らの頬を重ねた。

「……………すぐ戻る、お前の元へ」

赤面する少女を背に、アンパンマンは真紅のマントをなびかせて再び飛翔した。

その瞳に、愛と勇気と怒りを映して。

第五話 死と新生。(後書き)

そして、勇気は伝説へ。

第六話 神速の愛（前書き）

それは、神速の愛。

第六話 神速の愛

「……あれか…」

アンパンマンは空中で停止し、砂漠を爆走するジープを発見した。

「戻ってきやしたでえっ!!」

巨漢はジープの上に乗ながら、バズーカを構えてアンパンマンを睨みつけた。

「やれっ! ガラバス!!」

片手で器用にジープを操作するヤッポスは、巨漢をどやした。

「あいよおおっ!」

巨漢の構えたバズーカから弾頭が発射され、その翼をもった弾頭はアンパンマンに向かって真っ直ぐに加速した。

「雑魚がっ！狙いが甘いんだよっ！」

アンパンマンは自らのマントの裏に隠してあったガトリングガンを両腕で構えた。

「もう使わんと…決めてたんだがなあっ！」

苦笑いをしながら、弾頭とその先の地上のジープ睨みつけるアンパンマン。

ガトリングガンの標準が、その2つを捉えた。

「：FIREッ！！」

ガトリングガンは鋼鉄が軋む音を鳴らしながら、弾薬を吸い、分厚い貫通弾を掃射した。

無数に吐き散らされた弾丸はバズーカの弾頭を貫き通し、ジープを穴だらけにした。

「なっ！あああっ？！」

巨漢の男はジープから転げ落ちながらも、巨大な鉄球の鎖を握りしめた。

「降りてきやがれキッチン野郎！糞パンマンめ！尻穴ファツ〇してやるぞこのおッ！！」

ヤッポスは運転席から這い出て、アンパンマンを挑発し、中東製のサブマシンガン・カラシニコフを構えた。

「白兵戦か：望むところだ！」

アンパンマンは巨漢から六メートルほどのところに着陸し、巨漢を

睨みつけて弾切れのガトリングガンを放り捨てた。

「ぐらあええええええっ!!」

巨漢の投げつけた鉄球がアンパンマンに向かって加速する。
野球ボールのようなスピードのそれは、アンパンマンに直撃した。

「ぎはははははっ! あまいでえいっ!!」

巨漢は勝ち誇った顔をしながら、左腕で胸を叩いた。

「待てガラバス! まだ奴は……!!」

ヤッポスの叫びを聞き、巨漢は鉄球の方向を見つめた。

アンパンマンは、鉄球を受け止めていたのだ。

「なんともないぜ？」

けろりとしているアンパンマンが鉄球を蹴り上げる。

「バガなああっ?!」

鉄球は見えないほどのスピードで巨漢の男の頭に直撃する。

「うゝッ!？」

鉄球はその不細工な顔を体から抉り取り、血の雨が降り注いだ。

「くっ!：最近のアンパンは化け物かつ!」

カラシニコフを連射するヤッポス。

しかし中東製のマシンガンはゲリラが作っているため精度が悪く、ただでさえ補足できないスピードで迫っているアンパンマンにはかすりもしなかった。

「流石この世界を生きていただけの…ことはある!」

アンパンマンは鉛の雨をかわしながら、地上スレスレを加速した。

「だが！」

アンパンマンは瞳を細めて、拳を握りしめた。

「ちつくしよおおおおつ！！！」

絶叫しながらカラシニコフのケースを入れ替え、更に引き金を引くヤッポス。

「だが：正確な射撃故に予測もし易い！」

「ひひひひひっ！」

アンパンマンの拳が光に包まれる、ヤッポスはカラシニコフを放り出して逃げ出そうと駆け出した。

「天罰……光臨！」

アンパンマンの拳が、ヤッポスの頭を後頭部から吹き飛ばした。

「……」

アンパンマンはそのまま飛翔し、合掌をしながらヤッポスの亡骸を見つめた。

「ヤッポス……守るものがない貴様など……ばいきんまんほど強くない……」

血の雨と生首が砂の大地に撒かれ、やがてその血は風に流されていった……

「……」

アンパンマンは唇を閉じて風を背に飛行を始めた：

ただ一人の女の元へ、還るために……

第六話 神速の愛（後書き）

そして次週、最終回。

最終話 中東の空は青いか（前書き）

そして、完結する。

最終話 中東の空は青いか

「…さあて、今日のぶんを作るか：」

東京の中の市街地。

テロや軍隊の手がまだ届かない安全な国の中にその店は開いていた。

「あなた：今日も頑張って：私も頑張るわ」

女は、慣れていない手つきで洗濯物を洗いに出了かけた。

バリアフリー化が進んでいる街中は、徐々に彼女を迎え入れていった。

「…ああ：」

その男はパン粉がつまった袋を両手に抱え、調理場に立った。

「……………」

男はパンをこね始めた。

その時であった。

「ういっす！カレーパンマンです！」

「食パンマンです！」

空間を裂いて、二人のパンマンが現れた。

そう、彼らは時空の彼方からやって来たアンパンマンの仲間、食パンマンとカレーパンマンであった。

「アンパンマンって頭がアンパンの奴、見ませんでした？」

「頭が食べられるんですよ」

男は瞳を細めて二人を見つめた。

「…アンパンマン…か：」

男は小さく呟き、二人に背を向けた。

「…知らねえな………」

カレーパンマンと食パンマンは顔を見合わせると、時空間の裂け目の中に入っていく。

「ありがとうございましたっす」

「今見たものは忘れてくださいね」

男の背に一礼すると、二人は時空間の裂け目に消えていった。

「……………」

男は再びパンを作り出し、竈の中に入れた。

「よかったの…？…あなた…」

先ほどの女は、店頭でパンを並べながら厨房に向かって呟いた。

「……いいさ……もう俺はあの世界には……いられない」

男はパンをこねた手を見つめた。

「…故郷を捨てた二人が……幸せになっていいのかしら………」

女はカウンター越しに、厨房に立つ男の姿を見つめた。

「…さあな……だが…」

黄色いグローブを脱ぎ捨てた彼の手は五本の指があり、その手は窓から差し込む強い日差しを遮った。

冷たいほどに青い空が、男の目には染みていた。

「…血に濡れた俺の手でも……一人の人くらいは幸せにできるから……」

男は振り返って竈かまどからパンを取り出した。

「…中東の空は…青いか……」

焼きたてのパンは香ばしい香りを出し、その香りは店の中を満たし

た。

「…この…日本のように…」

その男は、パンを陽光に翳した。

そのパンは、アンパンであつた。

最終話 中東の空は青いか（後書き）

やなせたかしさん、やっぱりごめんなさい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0250b/>

（続）アンパンマン・シュール（仮）

2010年10月9日01時05分発行